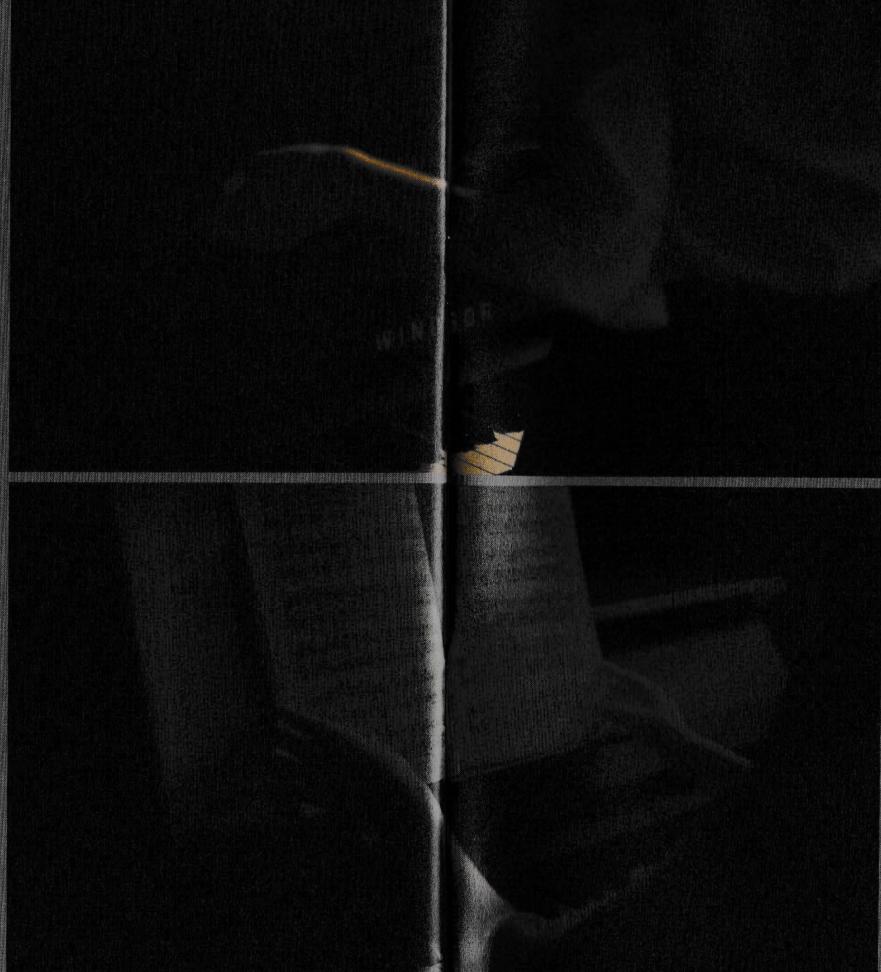




THIS IS TODAY | MEXAGOL PHOTOGRAPHY



pp.1-5, 22-24 (How Many Nights) ↗



*2 『Strangers』より

家です。彼は純粋なステートメントというよりは、時には日記的ともいえるようなバーバンク的な語りを交えつつ、政治性の高いテクストを書いて、作品はミニマリスト的に見えて、けれどそこには感情がある。その作品の本質や作品をつくった背景をはじめ、知ったときは衝撃を受けました。一緒にいた教師に、「たぶん君は好きだろ」とか、テクストを読んだらいいよといわれました。彼の書くナarrativeでは、そこから作品や文脈がわかつて大好きになりました。かなり影響を受けた作

高校卒業後、沖縄を出て大阪の専門学校へ行き、その頃はやりたいことが全然見つからなかったのですが、ウェブ日記などを通して、文章を書くことが楽しいと思うようになり、それではジャーナリズムを勉強してみようとアメリカに行つたけれど、自分の英語レベルでは厳しいかった。そんなときフォトジャーナリズムの授業を受けて、写真を勉強した、と思ふようになりました。

アメリカでフェリックス・ゴンザレス・トレースの作品を最初に見たとき、なぜか受け入れることができず、キャンディを受け取つたけれど戻しました。一緒にいた教師に、「たぶん君は好きだろ」とか、テクストを読んだらいいよといわれました。彼の書くナarrativeでは、そこから作品や文脈がわかつて大好きになりました。かなり影響を受けた作

ー沖縄→大阪→ニューヨーク→東京と移動を重ねるさまざまな境界を見つめるなかで、写真から映像、インスタレーション、そして小説へと表現の幅を広げてきたミヤギにとって、居場所を見出すことと表現の関係はどうなものだろうか。



*1 『New Message』より

に勝手に感情移入をしていたのかなという部分はあります。僕もアメリカにいたときの沖縄との距離の取り方といまでは違つたものになつていて、東京にいることは自分の選択でありつつも、ビザの取得ができず帰つてこざるを得なかつたという不甲斐なさも含めて、東京にいてもわづわづしている感じはずつとありました。ストレスはキューバ出身で、ゲイで、故郷から離れて暮らしていました。僕が故郷を離れたと思ったのはごく個人的な理由ですが、そこには存在だと考えたとき異文化のながめが感じたフレッシュいやカルチャーショックは、僕がニューヨークで感じたものとどこかが違うのだろうと思って、彼らの心理に興味を持ちました。東京に戻ってきたといつても、僕にとって東京ははじめて住む場所で、大きなカルチャーショックがありました。何年かはアメリカに戻りたいくらい思つていましたが、最近は環境に慣れ、以前のような居づらさがなくなつて、今とところ東京を離れる必然性を感じられない。心地よさも生まれてきて、もしかしたらそれによって見えなくなつてることもあるかなとは思います。

—ニューヨーク滞在中に手がけた写真シリーズ『Strangers』(2005-2006)は、異文化に身を置く居づらさのなかで私的な場所をどこまでつくるかという実験的な側面があった。そして滞在から10年の時間を経て書かれた小説『ストレンジャー』(2018)では、写真から浮かび上がる断片的な記憶が言葉によって再構成されしていく。

ニューヨークで見つけられずにいた自分の居場所やコミュニティを、写真を通して求めたのですが、できあがつて居づらさはすごくよそよそしかつた。それでもプロジェクトを続けるなかで、なんらかの関係ができた少しつひろがって、居やすさは得られるようになりました。

小説はフィクションとして書いているという前提がありますが、



*6《A Romantic Composition》より



*7《Flower Names》より

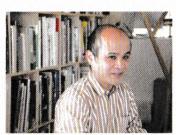
*3「American Boyfriend」プロジェクト：沖縄で沖縄人男性とアメリカ人男性が恋に落ちることの関係可能性などをテーマに、作品制作やトークイベントなどを開催。プロジェクトメンバーにキュレーターの兼平彦太郎、デザイナーの木村稔将、PRの増崎真帆がいる。

*4『ディスラント』(2019年4月刊行)：「アメリカの風景」(『文藝』2017年夏号),「暗闇を見る」(同,2017年秋号),「ストレンジャー」(同,2018年秋号)の三部作からなる小説集。アメリカ・日本・沖縄での経験を再構築し、歴史と社会の関係や自身のアイデンティティをポップカルチャーと現代文学の引用、そしてイメージから想起される記憶を媒介にして描く。



*5《The Ocean View Resort》より

一方で、そろそろ忘れてしまうかもしれない当時の記憶や感情を一度書き残しておきたいという思いがありました。写真的な作品と似たところがあるって、バイクショナルではあるけれど、作家としての自分のアイデンティティを語り直してみるといろいろ考えていくなかで、みようとしているのは、「American Boyfriend」(Strangers)は、「American Boyfriend」プロジェクト(*3)の出发点となる作品なのではと思い当たりました。それをプロジェクトの中に入り、三部作の小説『ディスラント』(2017年)*4は、自分のもじれる物語を自身のナレーションで語り直している。以後、『A Romantic Composition』(2015)*5、「6」(2016)*6、「7」(2017)*7として映像作品の構成はさらに重層的・多義的となっていました。さらには小説の執筆へと至る。



2012年にはじめたブログ「American Boyfriend」を機に、現代美術の連作を発表する。嚆矢となる『The Ocean View Report』(2013)*5は、自伝的ともいえる物語を自身のナレーションで語り直している。以後、『A Romantic Composition』(2015)*5、「6」(2016)*6、「7」(2017)*7として映像作品の構成はさらに重層的・多義的となっていました。さらには小説の執筆へと至る。

ブログは、最初は記録をする場所として、リサーチの経過や旅の記憶、その場所にまつわる自分の反応、作品に付随するステートメント的なテクストも書いていましたが、そのうちに自分のことやフィクション的な要素が混ざりはじめました。2012年にやった個展「American Boyfriend」を見た方から、もっとブログに人を誘導させた方がいい、これがプロジェクトのコアになるものでは、といわれました。なるほど、うだな展示以外の方法も含めてプロジェクトをひろげていきました。

ブログでやるのは、ますなによりも手軽だったのと、いろいろとご用がしやすい媒体だったからです。YouTube や音源、他のサイトなどと一緒に使うことが多いです。また、音楽関連の情報収集など、音楽を楽しむための情報収集にも活用しています。

えでこたと題した。『A Romantic Composition』と『The Ocean View Resort』が流れを

思つて興味があつたが引き込まれてはたらきもしないでいた。引用文を知つて形式的に使うのですが、すごく遠い時代だと思ったのが意外とそうでもなかつたり、感情移入できてしまふ。では何がどうかでしてみたら、ラジオやテレビショーンともつながりました。10代20代の音楽や文化を費していたコンピュータゲームにもなんとかの社会批判的な側面があつた親じやないか。そうしたサバカルチャーや使う「昔の自分」の関係性を語るなかでどんと過去に近づいていたのが、「いかなくなってしまった人たのい」とThe Dreams Have Faded(1991)です。

とつの物語が立ち上がりつくるようにつくりました。この作品に関しては、日本に戻って数年が経つて英語を忘れはじめている、発音がどうなくなってしまった、など自分の声の自分に残してしまった、といった記憶や物語をハイショーンとしてまとめて、とどめ自分の物語ではなくなりたるものと、もう一度自分の声で語り直してみるという試みです。最初から英語を前提に考えて、スクリプトもまず英語で書きました。
あえて日本語で物語にして感情的に「反応」してもらおうことで、取扱っているトピックや問題に近づいてもらえたたら、という意図があたので、意識的に音楽ドラマティックに使っています。説明調ではなく、流れをもたせたいので、スクリプトをどんどん削って誰がしゃべっているのか分らなくなるくらいまで、ひもつづきの物語としてはつながり切っているというような書き方をしました。風雲の移り変わりに対しで載せる言葉が多くても機能なくなるというのを意識していたので、限りなく少ない言葉で

えへったと思つた。

「暗闇を見る」で語られたイメージの話は、2006年に実家で撮られた映像作品『This Household: Reading Living Land and Otherwise』(2006)にも登場する。女性からハイツム・レーナーは、「作品にどのように織り込まれていくのだろうか、また、イメージ（音楽や映像）と言葉との関係はどうのうに考えているのだろう」。

「New Message」¹は作書を撮った記録集ですが、作品を撮
掲載しました。ここに書かれているものは、なにからかの作品化して
い出来事、もしくは記憶が浮かんでそれを作品化しつつ文筆を考え
ていく様子。なんだかとフィクションが混じって物語めしで
たテキストになってしまったという印象が強い。作品をつくり、自分の分
ライバーな空間「テーブル」の上などで写真に撮る。それは、自室での
制作風景であり、そこでであがった作品の記録でもありました。断片的
的なテキストで、細密なイメージを掛け合わせることで物語を立ち
上げられる試みです。

当初からわりと自分のペーパナルな過去だったり体験に基づいた文章
作品が多くて、それについてのステートメントを書いている感じ。だんだん
と逃げて、どうして自分が自分の記憶のことだったか物語を大文庫
になってしまって、それならもう少し物語にしてはどうらうかと思いま
る。『American Boyfriend』以降は、そういうテキストを意識的に書き
はじめました。アメリカにいた頃『Strangers』をつづった後、写真を多く
撮影しながら、物語をつむぎながら映像作品が増えてきました。
カメラで映像が撮れるようになつてから、映像作品が増えてきま
た。映像だと物語伝えやすかったというのもあるかと思います。

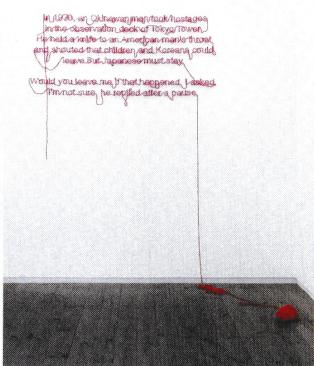


—《1970》(2016)【*8】での赤い糸は、編むことより、それがいつかほどけてしまうということに重きをおく。それは自身の体験を相対化する行為ともいえる。

もともと東京タワーにまつわる作品は「ひとつからつって」しました。10代の頃、東京タワーがありました。東京に象徴的な建物です。そして東京タワーを観るらしく、想像力で東京タワーを連想させてしまいます。赤い毛糸の作品は、東京タワーに起きた怪しき事件を描きつて、自分たちがそこにつらつらするだらうかと想像してから生まれたのです。東京に引越して一番最初につくった「東京タワー」(2007)と、いう映像作品があつて、越したばかりのがらんとした部屋で僕自身が自分で編みあひよしとされるけど、完成できない、そこから「1970」という作品につながっています。



*9 {Winter}

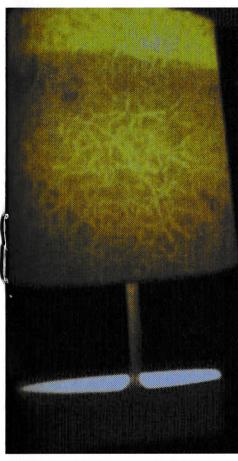


*8《1970》

—5人の女性を語った。「僕ではない女性の語り物語が繰りられる。20世紀初頭や太平洋戦争中のアメリカ、日本、そして南洋から帰場するに際して、女性たちによる記憶の最後に残るは、人間を愛したもの、その通り切り落としに消え去っていく、じうう水の精霊をモチーフにしたラヴェルの『シノン曲 オンディーヌ』だ。

一本本当に書きたいこと、言いたいことを別のものに託す。曖昧にすることによって浮かび上がる時代背景。複数の線で構成された、かつてあつたかもしれない物語に、観る者は引き込まれていく。

『How Many Nights』で展示している写真の作品には、手紙が検閲されてしまう。手紙の「届かない」として考えていって、『How Many Nights』の映像では、太平洋戦争の頃にアメリカに設営された白糸人収容所に暮らす女性が、友達に手紙をしたのである。自身の「アメリカンボーライフレンド」について語っているのが、人称代名詞が曖昧になる箇所があり、そのアメリカンボーライフレンドが誰のかわからなくなってくる。それが本当のことを書いているのかどうか。もししかしたら、検閲されることを知つて、あえて別の物語をかぶせることで、ふたりの親密さを語る手段として架空の存在をつくりあげてかるかもしません。



*10 『How Many Nights』より

『The Ocean View Room』と『A Romantic Composition』では、月は映画『八月十五夜の茶屋』の登場人物の台詞「彼らを取り巻く関係と結びついています。一方で『How Many Nights』における月や星空は、物理的・地理的な境界から解放されたつがりの空間であり、ある特定の明確な意味を持つてゐるわけではありません。マンザナの女性は、かつて星達ふたりにして見た星空に七十二伝説を連想しますが、友人はただ夏の大三角として見ている。そして別の時代と場所にいる女性はまた違う感情を持って夜空を眺めています。そうして、ひそやかな語りがつながっていく。それが示したり隠したりしているものは固定されずに、時間や環境の変化でほどぎ、どこかまた別のものにつながつたりする。

東京ローズの語りも、実在のローズが読み上げた原稿を元にしつつフィクションとして書いてるので、彼女が読んでいる原稿が果たして誰かが書いたものなのか、彼女の想像などのかわからぬよう、曖昧にしたかった。それは兵士たちに語りかけている言葉かもしれないし、もう少し親密な人なら電波を通して「セレナ

デ」を聴かせてはいるのかもしない。ここはかなりばやけたとか、誰が誰に向けて語っているか一方向だけではないひろがりを持たせたいと思つました。極めて「フィクション」的な史実とは別な東京ローズという存在が、「自分は太平洋のどこかにいる」と、ラジオを通して語りかけている。

37分ほどの作品のなかで語られてきた記憶が最後、音楽で思い出される。映像のなかで女性たちは小説や手紙を書き、女性作曲家のピアノ曲を弾ぎ、原稿を読み上げ、そして小説を翻訳するのですが、撮影にあたりイメージしていたのは日記を書く女性の姿でした。男性的な物語といつぱりは極めて女性的な日記のようないひそやかな語りを引き継いでいく形にしたかった。死後も様々な通じ合うはずのない個人的な語彙がつながつてしまつて、その流れを書く読むという所作を通してつなげてしまふと考えながら撮影しました。

音楽はクラーク・シューマンの夜想曲、ショーベルトの「セレナード」、ラヴェルの「オンドエース」を使つていますが、クラーク・シューマンがピアニストで作曲家だったということで、戦前、戦中の東京で作曲家を目指す女性が、5人の女性のうちのひとりとして描きました。「セレナード」の歌詞には「Nightengale」という単語も登場する。映像で流れるのはピアノ演奏のみで歌詞は出てきませんが、歌詞もふわりと消えるように終わっています。

A Japanese Nightingaleともつながつてくる。オンドエースについては一度消えてまた戻つて来るという神話的な円環に強く惹かれていました。ラヴェルの極めて印象派的な音楽は最後の幾つかの音が霧散するよな感じがまことにオンドエースが最後消えてしまつたり交わつたりしている短い映像がありました。その後の『Our Peace』を新しく撮り直して『How Many Nights』の最後の

方に組み込んでいます。ふたりの人間が煙草を吸つていて、煙が離れたり近づいたりしながら最後消えてしまう。出会いの夢さある時間と共に遡る。その間に、煙草がある。そこで、そこにもうふたりはいないけど、そういう関係性があったかもしないといつことが個人的には希望がなぞ思つてしまつます。

『Our Hope』も、煙草は燃え尽き、そこに確かにいたはずのふたりは存在しない。でも作品からはその気配を感じることができるはず。『How Many Nights』の最後の語り手も、かつて誰かとふたりで過ごした親密な時間を回想しながら煙草を吸い、音楽を聴く。かつてあった関係の残り香として、『Our Hope』がある。かつての存在の気配を、映像や写真の向こう側だけでなく、こちら側の空間にも残しました。実際のものがあることで見る人は気配や不在を感じ、また、それを媒介にして自分の記憶にもつながつてゆくかもしれません。『How Many Nights』や『Our Hope』が描くのは、フィクション的な関係性ではなく、あるものの、ある時間の体験や記憶をつなぎ、それが別の物語として、他の人の記憶にもつながる。オブジェやインスタレーション作品は、物語をスクリーンの向こう側から引き出していく過去や現在、未来の物語、フィクションと現実をつなぐ、ある種の装置として機能させています。

(2019年6月6日 9月20日) (収録)

| ESSAY |

When I Became A Shadow

ASABUKI Mariko

MIYAGI-san and I occasionally pass each other on a street in my neighbourhood. It is a quiet straight road, so you notice immediately if there is someone walking down from the other side. It feels long from the moment I recognise Miyagi-san until we get closer and pass each other. It is fine when he does not notice, but if Miyagi-san sees me as well, the time flows between us gets enormously prolonged. Our relationship is not the kind where we wave or run up to each other casually, so we end up exchanging too many nods and bows until we finally pass each other. We have never stopped for a chat. Miyagi-san and I do not even make eye contact in a short distance.

I got to know Miyagi-san by name in 2014, when someone told me about the screening of «American Boyfriend» at Harajuku's VACANT. I caught a cold that day, and could not go and watch the film. A few years later, an email from Miyagi-san came in through a friend.

Miyagi-san was shooting a new film «How Many Nights», and the email was an invitation to perform in it as one of his characters. It was not to show my face, however, nor to act. I was asked to be a shadow of a novelist from the early 20th Century, Onoto WATANNA.

Onoto Watanna was a pen name. Her real name was Winnifred EATON, a Chinese Canadian who claimed herself to be Japanese American and published a novel on Japan where she has never been. A memory of a place with no experience of visiting. I wondered what she remembered while she was writing. The penname Watanna (wataru, na / to cross over, name) was mysterious as well. She who made her way in places through words. In a portrait, she stands looking downwards, wearing a *kimono* in a casual manner. In Miyagi-san's email, a page from her novel, the opening part of a story called THE STORM DANCE, was attached. The plan was to film my hands writing it in cursive, and my back.

The issue was that my English comprehension was rather disastrous, and I could not write in script. I did learn them at school, but because my spelling is dodgy my cursive line is unconfident, and all the letters go floppy and limply, just as a slackened string. My mother is good at cursive writing, so she wrote an example for me and I practiced by tracing it until the shooting. Despite the effort, I could not write at all without the sample.

It was chilly on the filming night. Miyagi-san and I were just the two of us in the studio. Miyagi-san was shy as always, and stayed silent. I too remained mute and just changed into the costume, a shirt, took out a glass pen and a notebook, and sat down at the desk. The steam rising from the hot tea was beautiful and I was just watching it mindlessly. No particular order was given by Miyagi-san, and I kept writing Watanna's words on the notebook. In my poor cursive. After I wrote for a while I came back to the beginning. Repeat, and repeat. I did not understand the content at all, but I started to feel like my hand was writing autonomously. I just continued writing without knowing what kind of person she could have been. It was quiet and pleasant. After about an hour, Miyagi-san said "thank you", and I understood it was over. Without knowing where the camera was not feeling Miyagi-san's presence, it started and finished, and for a brief moment before I left after I got changed, we looked at the scenery of Central Park together which Miyagi-san just took back then.

ASABUKI Mariko

Novelist. *TIMELESS*, which was published seven years after the 144th Akutagawa Prize winning novel *Kikotowa* (in the latter half of the year 2010), depicts the memory of place and crossing of times. Her unique style of storytelling invites the reader into the borderless time axis.

| ESSAY |

影になった日

朝吹真理子

ミヤギさんとは、家の近くでたまにすれ違う。ひとけのない一本道なので、遠くから歩いてくるひとがすぐわかる。ミヤギさんだとわかつてから近づいてそれ違うまでが長い。相手が気づいていない場合は問題ないだけれど、ミヤギさんはわたしの存在に気づくと、果てしなく長い時間が二人の間に流れる。おーい！と手を振ったり駆け寄ったりする関係ではないので、すれ違うまで、べこべこ、互いに会釣のしすぎになる。立ち話をしたことはこれまで一度もない。近距離では、ミヤギさんと目もあわない。

ミヤギさんのことを知ったのは、2014年、原宿のVACANTで開催された「American Boyfriend」の上映会のことを人から教えてもらったからだった。わたしはその日風邪をひいて親られなかった。それから数年経つて、友人経由で、ミヤギさんからメールが来た。

そのときミヤギさんは『How Many Nights』という新しい映像作品を撮っていて、そのなかの登場人物のひとりとして、映像に出演しないかというお説いだった。顔が映るわけではなく、演技もするわけではない。20世紀初頭の小説家オノト・ワタナというひとの影としての撮影だった。

オノト・ワタナは筆名で、中国系カナダ人のユニフレッド・イートンが、自らを日系アメリカ人として偽って、一度も行ったことのない日本についての小説を発表した。行ったことがない場所の思い出。どんなことを思い出しながら書いたのか、興味が湧いた。ワタナ（涙る、名）という筆名も不思議だ。言葉でいろんなところを渡ったひとだ。彼女の写真をみると、着物を羽織つて前立加減でたっている。彼女が書いた小説の一ページ、THE STORM DANCEという一篇の冒頭も、ミヤギさんのメールには添付されていた。それを筆記体で書いている手の様子や背中を撮影することになった。

困ったのは、私の英語理解は疎遠的で、筆記体も書けない、ということだった。いちおう学校で習ったのだけれど、綴りが曖昧だから筆記体の線も迷い、全部の文字が混んで紛まないにびよびよにわんわんで握ってしまう。筆記体は母が綺麗だったので、まずは母に筆記体で小説を書きうつしてもらい、それをなぞって練習するのを撮

影まで繰り返した。しかし、お手本がないと全く書けなかつた。

撮影の日の夜は肌寒かった。ミヤギさんとスタジオにふたりきりだった。ミヤギさんは相変わらずシャイで、お喋りもしない。わたしも黙々と、衣装のシャツに着替え、ガラスペンとノートを取り出し、机に向かって座った。あたたかいお茶の湯気がきれいでそれをぼーっとみていた。ミヤギさんからとりわけ指示があるわけではなく、ひんすらノートに、ワタナの言葉を書いてゆく。下手な筆記体で、しばらく書いていると、また、冒頭に戻る。それを繰り返した。全く内容はわかっていないのに、じぶんの手が勝手に書いているような気がしていった。どんなひとなのかもわからないままひたすら書きつつしている。静かで心地よかった。一時間ほどたって、ミヤギさんが、ありがとうございます、というので、終わつたのだとわかった。カメラがある場所もミヤギさんの気配を感じることもないまま始まり終わり、着替えてから帰るまでのほんのわずかな間、セントラルパークでミヤギさんが撮ってきたばかりの景色と一緒にみた。

あさぶき まりこ

小説家。第144回芥川賞(平成22年度下半期)を受賞した『きことわ』から7年後に発表された『TIMELESS』は土地の記憶や時代の文鏡を描く。独特の語りを帯びた文体は、境目のない時間軸にいざなう。

ARTISTS

作家
と
現在

TODAY

ARTISTS

VOICE

ISHIKAWA Ryuichi

IHA Linda

NEMA Satoko

MIYAGI Futoshi

『作家と現在』 2019年 12月23日刊行